子ども用

伝道地便り

2025年第3期　南アフリカ・インド洋支部

第１話「怖かった自転車でのおつかい」　ザンビア

第２話「学校での誠実な態度」　ザンビア

第３話「喜びに輝く」　ボツワナ

第４話「皿洗いをしながらの賛美」　ジンバブエ

第５話「神様と共に成功する」　ジンバブエ

第６話「わたしは、イエス様を知らないの」　ナミビア

ADVENTIST MISSION

セブンスデー・アドベンチスト教団　伝道局　安息日学校部

伝道地便りの用い方の ヒント

伝道地便りに収められているのは、現地からの一人ひとりの生きた経験です。安息日学校でこれを用いるときには、生き生きとご紹介していただきたいのです。そのためのヒントを、いくつか列挙いたします。

1）前もって何度か目を通し、自信を持って読む。

2）棒読みは避け、証されている大事な部分を明確にしておく。

3）伝える時間はできるだけ短く。長くても５～７分。

4）だれが、いつ、どこで、何を、なぜ、どうしたかが分かるようにする。

5）できたらカードに文字や絵を書くなどの視聴覚的工夫を。

6）時には、スキット（寸劇）風にしてくださっても良いですね。

伝道地便りは、私たちが自分の証をするときの練習になります。
主の愛の証のために、「心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして」
紹介しましょう。

怖かった自転車でのおつかい　ザンビア

ティッチ

お母さんは、ティッチにとても大切なおつかいをお願いしました。お母さんはティッチにお店に行って買い物をし、それから、おばさんの家にも行ってほしいとお願いしました。

お店とおばさんの家は、ティッチの家の近くにはありませんでした。ティッチはザンビア北部の森の奥深くに住んでいました。おつかいのために、ティッチは自転車に乗って町まで行かなければなりません。その道のりは長く、家から町に行くまでに１時間かかり、町から家に帰るのにも１時間かかりました。

お母さんがティッチにおつかいを頼んだのは、午後３時過ぎのことでした。ティッチは暗くなる前に家に帰りたいと思いました。以前、暗くなってから、茂みの中からライオンやゾウ、それからヘビが出てきたことがあったからです。

ティッチは自転車に飛び乗ると、お祈りをしました。「天の神様、僕は町に行きます。どうぞ僕を導いて、危険な動物から守ってください。神様は前にも、僕を守ってくださいました。今回も守ってくださることを信じます。アーメン」

お祈りをすると、ティッチは町へ向かいました。ペダルをこぎながら、大好きな賛美歌を歌いました。ティッチの特に好きな賛美歌は、「みめぐみ、ゆたけき、主の手にひかれて」です。力いっぱい歌いました。

町に着くと、ティッチはまっすぐにお店に行き、砂糖、塩、油、それから洗濯用の洗剤を買いました。

それから、おばさんの家に行き、お母さんのための洋服が入った袋を受け取りました。

おつかいは、思っていたよりも長く時間がかかりました。家に帰る頃には、太陽が沈みかけていました。長い影が地面に伸びています。辺りはだんだん暗くなってきました。

ティッチは不安になりました。暗闇の中ではほとんど何も見えません。道には、なんの明かりもないのです。ティッチは小さな懐中電灯を持っていましたが、道全体を照らすほど明るくはありませんでした。

ティッチはペダルをこぐスピードを速めました。真っ暗になる前に家に帰りたかったのです。

すると、近道を見つけました。深い茂みの中を抜ける、舗装されていない道です。

近道を通れば、家に早く帰ることができます。ティッチは舗装された道から脇道に入り、その舗装されていない近道を進みました。

太陽はどんどん沈み、あたりはどんどん暗くなっていきます。ティッチはペダルをこぐスピードを、どんどん速くしました。

すると、とても奇妙なことが起こりました。ティッチが一生懸命にペダルをこいでも、自転車が速く進まなくなったのです。ティッチは足をできるだけ速く動かしましたが、自転車はスピードを落とすばかりでした。ティッチは力のかぎり、ペダルを踏みました。ところが、自転車は完全に止まってしまいました！

ティッチは驚き、戸惑いました。ポケットから懐中電灯を取り出して、自転車のどこがおかしいのかを確かめようとしました。チェーンは外れて

おらず、どこにもおかしなところはありませんでした。ティッチの戸惑いは、さらに大きくなりました。

それから、懐中電灯で、前方の舗装されていない道を照らしました。突然、ティッチは飛び上がりました。ティッチの体は震え始めました。前方のかすかな明かりの中に、大きなヘビが見えたからです。そのヘビは黒く、長さは4メートルほどあり、道を横切っていました。もしティッチが自転車で走り続けていたら、ヘビをひいていたことでしょう。

ティッチは家を出発する前にお祈りました。そして今、もう一度お祈りました。

「神様、僕の命を救ってくださり、本当にありがとうございます。どうか、このヘビが去って、僕が家に帰れるようにしてください。アーメン」

ティッチが目を開けると、ヘビは動き始めました。そして、暗闇の中に消えていきました。ティッチは自転車に戻りました。ペダルは問題なく動きました。ティッチは急いで家に帰りました。

家に着くとティッチは、興奮しながらお母さんに何が起こったかを話しました。

「どうして自転車が動かなくなったか、わからなかったんだ」と、ティッチは言いました。「でも、今はわかるよ。あの危険なヘビから僕を救うために、神様が僕の自転車をおさえていてくださったんだ。茂みの中に家は一軒もなくて、誰も僕を助けることはできなかったんだ。でも、神様が僕の命を救ってくださったんだ」

お母さんは、神様が息子を守ってくださったことを心から喜び、神様の愛に満ちた配慮を感謝しました。そして、この日からお母さんはティッチを午後に町へ行かせることはなくなりました。今では、午前中に町へ行かせています。暗くなる前に家に帰ることができるようにするためです。

今期の皆様からの13回献金は、人々を危険な動物やヘビから守ってくださる神様のことを子どもたちに知ってもらうために役立てられます。ティッチの住むザンビアや、南アフリカ・インド洋支部に属する他の国々の多くの子どもたちは、皆様からの13回献金を通して、子ども用聖書『Adventurer's Bible』を受け取ることになります。9月27日にささげられます皆様からの惜しみない献金を感謝いたします。

〈お話のヒント〉

- 地図でザンビアの位置を確認しましょう。
- Facebookで、このお話の写真をダウンロードしましょう。bit.ly/fb-mq.
- 南アフリカ・インド洋支部からの情報「Fast Facts and Mission Posts」を分かち合いましょう。bit.ly/sid-2025.

- このお話は、セブンスデー・アドベンチスト教会の「I Will Go」伝道戦略の以下の項目の具体例です。
  「聖霊に満たされた生活を送れるように、個人や家族を訓練する」(「霊的成長の目標」No.5)
  「青少年や若者が神を第一とし、聖書的世界観の模範となるよう支援する」(「霊的成長の目標」No.7)

詳細は、ウェブサイトIWillGo.orgをご覧ください。

宣教メモ

- 1905年に、5,436エーカー(2,200ヘクタール)の土地を開拓するために、労働者の一団がやって来ました。そこにルサカ駅ができました。9月には学校も開校しました。
- 最初の改宗者は、ルサカ駅から南方のビクトリアの滝に至る、鉄道沿線に住む人々と、学校の生徒たちでした。

学校での誠実な態度

ザンビア

シシェモ

あなたは新学年を遅れて始めたことはありますか?

もしあるなら、他の子どもたちがすでにしばらく一緒に過ごしたあとに、自分だけがあとから入ることが、どれほど心地良くないことが分かるでしょう。他の子どもたちはすでにお互いのことを知っていますが、あなたは誰も知らないし、周りの子どもたちもあなたのことを知らないのです。

これが、12歳のシシェモの感じた気持ちです。シシェモは、ザンビアにある新しい寮のある学校に、8年生として編入しました。事務的な手違いがあり、シシェモは女子校への入学が1か月も遅れてしまったのです。

そのため、シシェモは女子寮に入った時、誰のことも知りませんでした。また他の女の子たちは、誰もシシェモのことを知りませんでした。しかし、他の女の子たちは4週間も一緒に生活をしてきたのでお互いのことを知っていました。

しかし、シシェモにとって知り合いがいないことは、ちっとも問題ではありませんでした。〔なぜなら、それよりももっと大きな問題があったからです。〕シシェモは、とても重要な試験があり、その準備をしなければならないことを知ったのです。シシェモは、金曜日に学校に到着しましたが、その試験は月曜日に行われます。他の女の子たちは試験のために、すでに4週間前から試験の準備をしていました。先生は、金曜日の夜が試験の準備ができる最後のチャンスだと言いました。

シシェモの入った学校はセブンスデー・アドベンチストではない学校でしたが、彼女はセブンスデー・アドベンチストの家庭で育ちました。シシェモは金曜日の夜に勉強したいとは思いませんでした。

しかし、金曜日の夕方6時、先生はシシェモと他の55人の女の子たちを教室に集め、試験のために最後の準備をするよう指示しました。女の子たちは、3時間の自習時間が与えられました。

シシェモは席に座り、周りの女の子たちを見回しました。彼女たちは試験の準備を一生懸命にしています。シシェモは、安息日に関する本を取り出しました。安息日に読むための本を持ってきていたのです。

すぐに他の女の子たちは、シシェモが試験の準備をしていないことに気がつき、何をしているのかと彼女に尋ねました。シシェモは、自分がセブンスデー・アドベンチストの教会員であること、また、安息日を守っていることを説明しました。女の子たちは、お互いに顔を見合わせました。実はその中に、アドベンチストの家庭で育った6人の女の子たちがいたのです。しかし、彼女たちは試験の準備をしていました。そのうちの1人の女の子が言いました。「でも、神様は私たちの状況を理解してくださっているわ。私たちは、試験に合格しなくてはならないもの」

シシェモはそうは思いませんでした。神様は、「安息日を心に留め、これを聖別せよ」(出エジプト記20章8節)と言われました。だから、彼女は何があっても、安息日を聖(きよ)く守ろうと決心していたのです。

シシェモは、試験の準備ができませんでしたが、月曜日の試験に何の問題もなく合格しました。彼女は、神様が安息日を守ったことを祝福してくださったと確信しました。

しかし、これで話は終わりませんでした。この新しい学校では、毎週土曜日にすべての女子生徒

が参加して寮と学校の校舎を掃除しなければならないことを、シシェモは知ったのです。

シシェモは、安息日に働きたくありませんでしたし、問題を起こしたくもありませんでした。そこで、最初の数週間は、掃除の時間に運動場に隠れていました。ところが、ある先生が運動場に隠れている彼女を見つけ、なぜ手伝わないのかと尋ねました。シシェモは、自分が安息日を守る信者であることを説明しました。先生は理解してくれました。そして、日曜日に掃除をすることを許可してくれました。

すると、面白いことが起こりました。他のアドベンチストの家庭から来ていた女の子たちが、シシェモが安息日を守っていることを見て、自分たちも日曜日に働いていいかと尋ねたのです。彼女たちも許可を得ることができ、アドベンチストの女の子たちは、安息日を聖く守り始めました。

シシェモの誠実さは、アドベンチストではない家庭から来た他の女の子たちの注目を集めました。彼女たちはシシェモに安息日について、たくさんの質問をしました。「なぜ、あなたが安息日を守っているのか、教えてほしい」と、ある女の子は聞きました。

「私たちは、イエス様が日曜日によみがえられたから、日曜日に礼拝しているわ。なぜ、あなたは土曜日に礼拝するの？」と、他の女の子が言いました。

シシェモは、安息日の本当の意味について話しました。彼女は、神様が最初に第七日を祝福し、安息日を守るように言われたこと、そして、それはイエス様がよみがえられたことと何の関係もないことを話しました。聖書は、こう述べています。「第七の日に、神は御自分の仕事を完成され、第七の日に、神は御自分の仕事を離れ、安息なさった。この日に神はすべての創造の仕事を離れ、安息なさったので、第七の日を神は祝福し、聖別された」（創世記２章２、３節）。

多くの女の子たちは、第七日が本当の安息日であることに感動しました。彼女たちは、シシェモにならって安息日を守り、日曜日に働きたいと申し出ました。

シシェモの忠実さを通して、アドベンチストではない家庭出身の女の子たちが、ザンビアの寮で安息日を守り始めるようになりました。

シシェモを用いて、ザンビアの多くの女の子たちに安息日を愛するように導いた神様が、あなたを通して、どんなすばらしいことをしてくださるでしょうか。

今期の 13 回献金は、シシェモの故郷であるザンビアの子どもたちが、安息日の主について学ぶことを支援します。この献金は、子どもたちに子ども用聖書『Adventurer’s Bible』を配布するために用いられます。９月 27 日にささげられます皆様からの惜しみない献金を感謝いたします。

〈お話のヒント〉

・ザンビアを地図で確認しましょう。
・シシェモが寄宿舎の学校を卒業して夏休みを迎えた頃に、アドベンチストの伝道チームが彼女に会いました。彼女はザンビアを離れ、アメリカで勉強するために準備をしていました。彼女は神様が海外で学べる機会を与えてくださったと信じています。彼女は、ザンビアでの大学入試が安息日だったために受験を拒否しましたが、神様は彼女に名誉を与え、アメリカの大学に全学奨学金を頂いて学べるようにしてくださったのです。
・シシェモの短いYou Tube動画を見てみましょう。bit.ly/Sishemo-SID.
・Facebookでお話の写真をダウンロードしましょう。 bit.ly/fb-mq
・南アフリカ・インド洋支部からの情報「Mission Posts and Fast Facts」を分かち合いましょう。bit.ly/sid-2025.

・この伝道地便りは、セブンスデー・アドベンチスト教会の「I Will Go」伝道戦略の、以下の要素を含んでいます。
「牧師だけでなく、老若男女を問わず全ての教会員がキリストを証し、弟子を作る喜びにあずかる生き方として、世界宣教の概念と宣教のための犠牲を復興させること」（「霊的成長の目標」No.1）
「聖霊に満たされた生活を送れるように、個人や家族を訓練する」（「霊的成長の目標」No.5）
「青年が神様を第一とし、聖書的な世界観を体現できるように支援する」（「霊的成長の目標」No.7）

喜びに輝く

ボツワナ

ハチリエ

このお話は、お母さんが息子を教会に連れて行ったお話だと、あなたは思うかもしれません。ところが実際は、息子がお母さんを教会に連れて行ったお話です。

どういうことでしょうか。それでは、説明しましょう！

ハチリエという名前の男の子は、3歳の頃からボツワナの教会に毎週通い始めました。お母さんは朝、ハチリエを教会に連れて行って、教会に預け、午後になると家に連れて帰りました。

お母さんは、セブンスデー・アドベンチストの教会員ではありませんでした。しかし、ハチリエのおばあさんは教会員でした。そして、この子は安息日に教会に行かせてあげてほしいと、お母さんに言ったのです。

そのため、お母さんはハチリエが3歳の時から毎週教会へ連れて行きました。4歳の時も、5歳、6歳、7歳、8歳、9歳、そして、10歳の時も連れて行きました。11歳、12歳の時も連れて行きました。毎週安息日、ハチリエはいつも顔を喜びに輝かせて家に帰ってきました。教会で神様を礼拝することが大好きだったのです！

しかし、ある安息日、ハチリエは悲しい顔をして家に帰って来ました。教会でひとりぼっちでいることを悲しく思ったのです。「お母さん、毎週安息日、僕は他の家族といつも一緒にお昼ごはんを食べるんだ」と、ハチリエは言いました。「お母さんも僕と一緒に教会に来てくれない？　僕にも家族がいることを他の人たちに見せたいんだよ」

すると、お母さんは悲しく思いました。お母さんは息子を大切にする良い母親でいたいと思っていました。しかし、息子はまるで、毎週安息日、他の家族から別の家族へと、お昼ごはんをもらいに行く孤児のように思えたのです。

そこで次の安息日、お母さんはたくさんのお昼ごはんを用意して、ハチリエと一緒に教会に行きました。

ハチリエは、大喜びです！　友だちみんなを呼び、さらに牧師も呼びました。「来てよ！　僕のお母さんだよ！」と、彼は言いました。「僕たちと一緒に食べよう！　僕のお母さんがみんなの分も用意してくれたんだ！」

ハチリエの友だちは、彼のお母さんを見に来ました。今まで安息日ごとに、ハチリエにごはんを分けてくれていた家族たちも、ハチリエのお母さんに会いに来ました。さらに牧師もハチリエのお母さんに会いに来ました。

ハチリエの顔は喜びで輝きました。それは、最高の安息日でした！

しかし、それでもお母さんは、悲しい気持ちでした。息子が教会でひとりぼっちでいることが分かったからです。

そのため、次の安息日もお母さんは、またたく

さんのお昼ごはんを用意して。ハチリエと一緒に再び教会に行きました。

ハチリエは、とても幸せでした！　ハチリエは満面に笑みを浮かべました。それから、お母さんは毎週安息日に教会に通うようになりました。

間もなく、ハチリエは心をイエス様にささげる決心をしました。そして、お母さんをバプテスマ式に招待しました。お母さんは、水の中から上がる息子の姿を見ました。ハチリエの顔は、喜びで輝いていました。

その時、お母さんの心に同じ喜びを持ちたいという思いが芽生えました。

聖書は、喜びが聖霊の実の一部であると記しています。「これに対して、霊の結ぶ実は愛であり、喜び、平和、寛容、親切、善意、誠実、柔和、自制」です（ガラテア人への手紙 5 章 22、23 節）。聖霊に満たされると、人は喜びを得ることができます。

お母さんはイエス様に心をささげる決心をしました。そして、セブンスデー・アドベンチストの教会でバプテスマを受けました。

もうお分かりでしょうか。このお話は、お母さんが息子を教会に連れて行ったお話だと思うかもしれません。しかし、実際には息子がお母さんを教会に連れて行ったお話なのです。そして、聖霊の喜びがハチリエの家族に広がって、ハチリエは、お父さんも彼の兄弟たちも教会に連れて行くことができました。今日、家族みんなが、安息日に神様を喜んで礼拝しています。

今期の 13 回献金は、ボツアナや南アフリカ・インド洋支部に属する他の国々に住んでいる子どもたちに喜びを伝える為に用いられます。献金の一部は、霊の実についてのアニメを作成する為に用いられます。皆様からの惜しみない献金を感謝いたします。

〈お話のヒント〉

- ボツアナの国を地図で確認してみましょう。
- 母親のマリタさんの短いYoutube動画を見てみましょう。
  bit.ly/Martha-SID.
- このお話の写真をFacebookでダウンロードしましょう。bit.ly/fb.mq.
- 南アフリカ・インド洋支部の情報「Mission Posts and Fast Facts」を分かち合いましょう。bit.ly/sid-2025.

・この伝道地便りは、セブンスデー・アドベンチスト教会の「I Will Go」伝道戦略の、以下の要素を含んでいます。

「牧師のみならず、全世代の教会員 1 人ひとりが世界伝道という考えを持ち、その使命のために献身する生き方を、キリストの証人となり弟子を作るという喜びにより実践すること」（「伝道の目標」No.1）

「聖霊に満たされた生活を送れるように、個人や家族を訓練する」（「霊的成長の目標」No.5）

「青年が神様を第一とし、聖書的な世界観を体現できるように支援する」（「霊的成長の目標」No.7）

皿洗いをしながらの賛美

ジンバブエ

エンジェル

エンジェルは家で皿洗いをしながら、声を上げて、神様への心からの賛美を歌っていました。神様の愛についての賛美歌を歌うとき、彼女はまるで天の御座の前に立っているような気持ちになりました。

すると、お母さんがとても怒った顔つきで台所に入ってきました。そして、怒鳴り声を上げました。「家では、そんな歌を歌わないで！ あなたは、学校にいるときだけセブンスデー・アドベンチストなのよ。家では、私の教会の信者なのよ」。エンジェルは口を閉じました。歌うのをやめて、お母さんを悲しそうに見ました。

お母さんとの問題は、エンジェルがジンバブエのブラワヨにあるアドベンチストの学校に転校してから始まりました。お母さんはエンジェルを、アドベンチストの学校に行かせたくありませんでした。お母さんは自分の教会の学校に行ってほしいと思っていました。しかし、お父さんの友だちがアドベンチストの学校を勧めてくれたので、お父さんはエンジェルにその学校に行くよう強く勧めたのです。

アドベンチストの学校で、エンジェルは黒い表紙の賛美歌集をもらいました。表紙には金色の文字で、「キリストの歌」と記されていました。学校の生徒は礼拝の時にこの賛美歌集から歌いました。エンジェルはすぐに賛美歌が大好きになりました。彼女のお気に入りの賛美歌は、「イェス君、イェス君、み救いに」です。

エンジェルは、賛美歌集を家に持ち帰り、朝と晩に神様と過ごす特別な時間に賛美歌を歌いました。家のお手伝いをしながら歌ったり、床を掃きながら歌ったり、洗濯をしながら歌ったりしました。そしてある日、皿洗いをしながら、「われをももらさで、入れたまえ」と賛美歌を歌っていると、お母さんが台所に飛び込んできて、黙るように命じたのです。

それから、エンジェルは家で歌うことをやめました。しかし、朝と晩に神様と過ごす特別な時間に、心の中で自分の大好きな賛美歌を思い出しながら、お母さんのためにお祈りをしました。「砕けた心の叫びをお聞きください。どうぞ、お母さんがあなたを受け入れて、私たちみんながセブンスデー・アドベンチストになれますように助けてください」

エンジェル自身も、セブンスデー・アドベンチストの信者になりたいと思っていました。アドベンチストの学校に通い始めてまだ数か月でしたが、彼女は聖書を読むことによって、イエス様をすでに愛していました。安息日にセブンスデー・アドベンチストの教会に行きたいと思いましたが、お母さんは許してくれませんでした。お母さんはエンジェルに家にいて宿題をするか、洗濯をするか、家の掃除をしなさいと言いました。

エンジェルは学校のチャプレン〔学校付きの牧師〕のところへ行き、家の状況を話しました。チャプレンはエンジェルと一緒に祈り、こう言いました。「あなたは、お母さんのために、毎日祈り続けなければなりません」

ある日、エンジェルが皿洗いをしていた時、自分でも気がつかないうちに、神様への心からの賛美を歌っていました。賛美歌を歌っている時、お

母さんが台所に入ってきました。しかし、今回はお母さんの顔は怒っていませんでした。何も言いませんでした。エンジェルは、お母さんが文句を言わなかったがうれしくてたまりませんでした。次の日もまた、エンジェルは家で賛美歌を歌いました。

それから数日後、お母さんはエンジェルに、実は彼女の歌が好きなことを打ち明けました。まるで家の中に太陽の光が差し込んで来たかのようだと、言うのです。「あなたが家で歌っても、構わないわ」と、お母さんは言いました。

エンジェルは、とても幸せでした！　彼女はその晩、神様との特別な時間に、感謝の祈りをささげました。そして、安息日に教会に通うことを、お母さんが許してくれるように、また、セブンスデー・アドベンチストの信者になることを許してくれるように祈りました。

その週の金曜日、エンジェルはお母さんに安息日に教会に行ってもいいかと尋ねました。これまではいつも決して許してくれませんでしたが、今回は、「構わないわ」と言ってくれました。

それから、エンジェルは毎週安息日に教会に行くようになりました。

エンジェルは、とても幸せでした！　彼女はセブンスデー・アドベンチストの信者になることをお母さんが許してくれるように、さらに一生懸命に祈りました。

ある安息日、教会の牧師が、バプテスマの準備をしたい人はいませんかと尋ねました。エンジェルは家に帰り、お母さんにバプテスマを受けてもいいかと尋ねました。驚いたことに、お母さんは構わないと言いました。エンジェルはバプテスマを受け、アドベンチストの教会に加わりました。

エンジェルは、とても幸せでした！　彼女はお母さんとお父さんがセブンスデー・アドベンチストになるように祈り始めました。

現在、エンジェルのお父さんはバプテスマを受ける準備をしています。彼女は、お母さんもバプテスマを受けるのは時間の問題だと確信しています。エンジェルは、神様が祈りを聞いて、応えてくださることを知っています。神様は、彼女が家で賛美歌を歌えますように、という祈りを聞いてくださいました。神様は、彼女が教会に通い、バプテスマを受けることができますように、という祈りを聞いてくださいました。そして、彼女の両親についての祈りも聞いてくださるのです。毎朝、毎晩、彼女は神様との特別な時間に祈り、賛美歌を歌っています。「♪イェス君、イェス君、み救いにわれをももらさで入れたまえ。主よ、主よ、ききたまえ、くだけし心のさけびをば♪」

皆様からの今期の 13 回献金を感謝いたします。この献金はジンバブエや南アフリカ・インド洋支部に属する他の国々に住んでいる子どもたちにイエス様のことを伝えるために用いられます。13 回献金の一部の計画は、子どもたちに子ども用聖書『Adventurer's Bible』を配布することです。もう一つは、霊の実についてのアニメを作成するために用いられます。皆様からの惜しみない献金を心から感謝いたします。

〈お話のヒント〉

- ジンバブエの国と、エンジェルが住んでいる南西部の都市ブラワヨを確認して見ましょう。
- エンジェルの大好きな賛美歌「イエス君、イエス君、み救いに」を、彼女が歌っている短いYouTube動画を見てみましょう。bit.ly/Angel-SID.
- このお話の写真をFacebookからダウンロードしましょう。bit.ly/fb-mq.
- 南アフリカ・インド洋支部の情報「Mission Posts and Fast Facts」を分かち合いましょう。bit.ly/sid-2025

- この伝道地便りは、セブンスデー・アドベンチスト教会の「I Will Go」伝道戦略の、以下の要素を含んでいます。
  「牧師のみならず、全世代の教会員1人ひとりが世界伝道という考えを持ち、その使命のために献身する生き方を、キリストの証人となり弟子を作るという喜びにより実践すること」（「伝道の目標」No.1）
  「聖霊に満たされた生活を送れるように、個人や家族を訓練する」（「霊的成長の目標」No.5）
  「青年が神様を第一とし、聖書的な世界観を体現できるように支援する」（「霊的成長の目標」No.7）

神様と共に成功する

ジンバブエ

エマニュエル

エマニュエルは、まだ10歳でした。しかし、エマニュエルは、自分を役立たずで、何の価値もない人間のように思っていました。なぜなら、彼は目が見えなかったからです。エマニュエルは、生まれつき目が不自由でした。

そんなエマニュエルに、ある人が点字で教育を受けられる学校のことを教えてくれました。点字は、目の見えない人が指を使って読むための特別な文字のことです。エマニュエルの住んでいるジンバブエでは、点字で授業を行っている学校は多くありませんでした。

エマニュエルは、点字を使う授業を受けたいと思いました。目が見えなくても、学校で勉強したいと思ったからです。そこでエマニュエルは、ソルシ初等教育学校で学び始めました。

最初、エマニュエルはクラスについていくことに苦労しました。指で文字を読むことを一から学ばなければなりません。それに、自尊心が低かったからです。これまで何度も、目の見えない人は人生で成功することができないという嘘を聞かされてきました。そのために、エマニュエルは、人生で成功できないと思い込んでいました。

しかし、セブンスデー・アドベンチストの学校でイエス様のことを学び始めると、その状況は変わりました。エマニュエルはそれまで、イエス様のことを一度も聞いたことがありませんでした。彼は自分がイエス様から愛されていることを知ります。イエス様にとって自分は大切な存在であり、必要とされ、才能が与えられていることを知るのです。学校で宗教強調週間が行われた時、エマニュエルはイエス様に心をささげる決心をしました。

エマニュエルはイエス様を目で見たことも、聖書を目で読んだこともありません。しかし、彼は指で聖書を読み、自分がイエス様から愛されていることを信じました。エマニュエルはバプテスマを受けて、イエス様に生涯、仕えることを約束しました。

しかし、イエス様は彼の人生を成功に導いてくださるのでしょうか？

エマニュエルは初等教育学校を卒業した時、大きな試練に直面しました。その試練を乗り越えるのは不可能に思えました。ソルシのアドベンチスト中等教育学校に進学するために、彼は試験を受ける必要があったのです。しかし、試験の準備のために必要なすべての教科書を手に入れることができませんでした。彼はきちんとした勉強ができませんでした。どうすればいいのでしょうか？

エマニュエルは、イエス様を思い出しました。イエス様にとって自分は大切な存在であり、必要とされ、才能が与えられていることを思い出しました。そして、こうお祈りしました。「聖書のフィリピ4章13節に、『わたしを強めてくださる方のお陰で、わたしにはすべてが可能です』とあります。ですから神様、不自由であるからといって、何もできないというわけではないのです。私は人生で成功できるのです。どうぞ、お助けください」

すると、信じられないことが起こりました。エマニュエルはすべての試験に合格しました。さらに、合格しただけでなく、誰よりも高い点数を取

ることができたのです。

優等な生徒を表彰する特別な式典で、ある先生がエマニュエルを学校の講堂の前に来るよう、呼びかけました。そして、今回の試験で総合的に最も優秀な生徒は、エマニュエルであったと発表しました。

エマニュエルは、どうしたでしょうか？　彼は笑顔で先生と生徒たちからの拍手を受けたのでしょうか？　いいえ、受けませんでした。エマニュエルは神様にすべての栄光を帰す必要があると信じていたので、前に進み出ると、みんなの前で、次のようにお祈りしました。

「神様、私が成功するように助けてくださり、ありがとうございます」と、彼は祈りました。「『わたしを強めてくださる方のお陰で、すべてが可能です』というのは、真実です」

エマニュエルは、人生を成功させる秘決は神様にあると信じています。自分が文字を読むことができるのも、学校で成功できるのも、そして、自分が取るに足らない人間ではなく、大切な人間であることも、神様のおかげであると、彼は友だちに話しています。

エマニュエルの友だちには、目の不自由な人もいれば、目が見える人もいます。しかし、エマニュエルは、神様を人生にお迎えして初めて、本当の意味で見えるようになることを、皆に知ってほしいと思っています。「神様が共にいてくださるおかげで、僕の人生はうまくいきます」と、彼は言います。「僕は、明るい未来が待っていると確信しています」

エマニュエルがソルシ・アドベンチスト中等教育学校で、神様のことを学ぶことができるのは13回献金のおかげです。1994年の13回献金は、ジンバブエにソルシ・アドベンチスト中等教育学校を開設するために用いられました。今期の13回献金は、ジンバブエや南アフリカ・インド洋支部に属する他の国々にいる子どもたちに神様のことを伝えるために用いられます。13回献金の一部は、子どもたちに子ども用の聖書『Adventurer's Bible』を配布するために、また霊の実についてのアニメを作成するために用いられます。皆様からの惜しみない献金を感謝いたします。

〈お話のヒント〉

- ザンビアと、ブラワヨの都市を地図で確認しましょう。ソルーシ・アドベンチスト高校はブラワヨから車で約45分の場所にあります。
- エマニュエルの短いYouTube動画を見ましょう。bit.ly/Emmanuel-boy.
- このお話の写真をFacebookからダウンロードしましょう。bit.ly/fb-mq.
- 南アフリカ・インド洋支部の情報「Mission Posts and Fast Facts」を分かち合いましょう。 bit.ly/sid-2025

- この伝道地便りは、セブンスデー・アドベンチスト教会の「I Will Go」伝道戦略の、以下の要素を含んでいます。
  「聖霊に満たされた生活を送れるように、個人や家族を訓練する」（「霊的成長の目標」No.5）
  「子ども、青年の入信、再定着、礼拝出席を増加させる」（「霊的成長の目標」No.6）
  「青年が神様を第一とし、聖書的な世界観を体現できるように支援する」（「霊的成長の目標」No.7）

豆知識

- ジンバブエの国家のシンボルは、ハングウェと呼ばれる黄金の鳥で、国旗や貨幣に描かれています。
- グレートジンバブエの石造建築遺跡からは、台座に置かれた黄金の鳥の石彫が発見されています。おそらく、ダルマワシか、アフリカのヤシハゲワシをあらわしていると考えられています。

「わたしは、イエス様を知らないの」 ナミビア

カルーパレルエ

カルーパレルエは、ごくふつうの７歳の女の子です。彼女は、遊んでいるときが一番幸せで、怒られたときが一番悲しくなります。マカロニを食べるのが大好きです。しかし、イエス様のことを聞いたことはまだ一度もありません。

カルーパレルエは、地図には載っていない場所に住んでいます。彼女はナミビア北部の砂漠の奥深くにある、４つの小屋からなる農場で、家族と一緒に住んでいます。一番近くにあるお店でも、歩いて７時間かかります。彼女の家族は車どころか、自転車さえ持っていません。どこかに行くときには、たいてい歩かなければなりません。

しかし、カルーパレルエは、お店に行く必要がありません。彼女の家族は、他のヒンバ族の多くの人々と同じように、買い物をするためのお金がほとんどないからです。

その代わりに、この小さな女の子は、両親や５人の兄弟姉妹が、牛や山羊を育てるのを手伝って、１日を過ごします。雨季になれば、白い実のとうもろこしを植え付けるお手伝いもします。

とうもろこしは、家族の一番大切な食糧です。カルーパレルエは、お母さんがとうもろこしを挽いて粉にするのを手伝い、鍋にその粉と水を入れて、火にかけて煮ます。とうもろこしの粉と水を一緒に煮ると、とろみのある、白くておいしいお粥ができます。ほとんど毎食、カレーパレルエはこのお粥に、山羊の乳か牛の乳でできた、サワーミルクをかけて食べます。

おばあさんが政府から年金をもらったときなど、家族に少しのお金ができたら、誰かが７時間歩いて一番近くのお店に行き、カルーパレルエの大好きな食べ物、マカロニを買うことがあります。

「わたしは、マカロニが好き」と、カルーパレルエは言います。「でも、たまにしか食べられないの。だって、買いに行かないといけないでしょう？　それに私たちにはお金がないもの」

彼女は、毎日とうもろこしのお粥にサワーミルクをかけて食べれば、それでとても幸せなのです。彼女にとって、それはたいへん美味しいのです！

雨季が終わると、とても乾いた天候になります。カルーパレルエと家族は農場を離れて、牛や山羊のための水と草を求めて、砂漠をあちらこちらと歩き回ります。家族は１年のうち、およそ８か月間は旅をします。そして次の雨季が来ると、とうもろこしを育てるために小さな農場に戻るのです。

ナミビアは砂漠にあるため、１年の大半は非常に暑いです。カルーパレルエの衣服は、スカートのように見える布１枚だけです。彼女の家族は皆、同じような格好をしています。アフリカの暑い日差しの下では、そのような軽装の方が快適だからです。

カルーパレルエの髪の毛は、２本の三つ編みにして彼女の額に垂らしています。小さな女の子は皆、このような髪型をします。もう少し大きくなると、お母さんやおばあさんのように、たくさんの三つ編みにします。そして、その三つ編みに赤い粘土を混ぜ込みます。赤い粘土は、虫や厳しい砂漠の気候から身を守るために役立つのです。

カルーパレルエは、遊んでいるときが一番幸せです。彼女は他の女の子と手を叩いて、ダンスを

踊る遊びが好きです。また、ドッジボールも好きです。友だちと一緒にボロ布でボールを作り、それを投げ合って、ドッジボールをします。

カルーパレルエは、叱られたときが一番悲しくなります。お手伝いをさぼって遊んでいると、お母さんに叱られます。つい先日のことでした。お母さんは、幼い彼女に、プラスチックの容器を持たせて井戸から水を汲んで来るように言いました。井戸まで歩くとおよそ 15 分かかります。また、帰るにもおよそ 15 分かかります。合わせると 30 分から 40 分ほどの道のりです。

お母さんは、幼い彼女が水を汲んで帰って来るのを待っていました。30 分が経ちました。40 分が経ちました。お母さんは、何かがおかしいと思いました。カルーパレルエを探しに出かけました。すると、井戸の近くで友だちとドッジボールをして遊んでいるカルーパレルエを見つけました。

「なんて、おばかさんなの!」と、お母さんは叫びました。乾いた枝を地面から拾いました。「おしおきよ!」

カルーパレルエは泣きながら、逃げました。お母さんは、彼女を叩いたり、追いかけたりしませんでした。彼女はただ、とても怒っていることを示すために、枝を振り上げたのです。

カルーパレルエは水を持って家に帰り、お母さんが昼食のためにとうもろこし粥を作る、お手伝いをしました。

カルーパレルエ（右）、おばあちゃん（前列着席）、お母さん（後列着席）、アンドリュー・マチェズニ（インタビュアー）と話す。

カルーパレルエは、学校に通う年齢になりました。一番近くの公立の小学校は彼女の小屋から歩いて 20 分です。しかし、お母さんは彼女が学校に通わせたいとは思っていません。読み書きを覚えることは時間の無駄だと考えているからです。そもそも家には、読む本も、書く紙もありません。紙や鉛筆などの学用品を買うにはお金が必要です。ほとんどお金がないので、学校に通わせることなど考えられないのです。

お母さんは、カルーパレルエが家にいて、水を汲みや他の仕事を手伝った方がいいと考えています。

カルーパレルエ自身も学校に行きたいとは思っていません。それより遊んでいたいのです。

カルーパレルエは学校に行ったことが一度もないので、文字が読めません。彼女のお母さんも、おばあさんも、学校に行ったことがないので、字を読むことができません。字を読むことができないので、聖書を読んだこともありません。

おばあさんが初めてイエス様のことを聞いたのは、セブンスデー・アドベンチストの牧師が彼女の家を訪れた時のことでした。牧師は、安息日に近くの木の下で集会を開くので、その教会に来てほしいとおばあさんを招待しました。おばあさんは牧師に、また来て、聖書に書かれているイエス様のことを教えてほしいと頼みました。

そこで牧師はおばあさんとの聖書研究を始めました。おばあさんは、お母さんに、学んだイエス様のことを伝えました。しかし、お母さんはカルーパレルエにまだ伝えるチャンスがありません。そのため、カルーパレルエは他のヒンバ族の多くの子どもたちのように、イエス様のことを聞いたことはまだ一度もないのです。

「わたしは、イエス様を知らないの」と、彼女は言いました。

ナミビアに住んでいるカルーパレルエと、南アフリカ・インド洋支部に住んでいる多くのイエス様を知らない子どもたちのためにお祈りください。今期の 13 回献金は、子どもたちにイエス様を伝えるために子ども用の聖書『Adventurer's Bible』を配布するために用いられます。カルー

パレルエのような読み書きができない子どもたちには、子ども向けの霊の実についてのアニメシリーズを通してイエス様を学ぶことができるでしょう。今日、私たちが支援しているその他の13回献金プロジェクトには、南アフリカにある影響力を持つ施設：２つの病院、新しい学校、そして、ザンビアの宣教船が含まれています。皆様からの惜しみない献金を感謝いたします。

〈お話のヒント〉

- ナミビアを地図で確認しましょう。北部にある町オプウォは、カルーパレルエの農場から一番近くにあるお店の場所です。
- カルーパレルエの短いYoutube動画を見てみましょう。bit.ly/karuuparerue-SID.
- 1993年と、2012年にささげられました13回献金は、特にヒンバ族の伝道のために用いられました。その数は、およそ5万人です。2012年には、聖書を収録したMP3が彼らに配布されました。
- このお話の写真をFacebookからダウンロードしてみましょう。
  bit.ly/fb-mq.
- 南アフリカ・インド洋支部の情報「Mission Posts and Fast Facts」を分かち合いましょう。bit.ly/sid-2025.

- この伝道地便りは、セブンスデー・アドベンチスト教会の「I Will Go」伝道戦略の、以下の要素を含んでいます。
  「10/40ウィンドウの中にある伝道が及んでいない、あるいは伝道が十分ではない地域に住む人々とキリスト教以外の宗教に対するアドベンチストの働きを強化し、多様化させる」（「伝道の目標」No.2）
  「聖霊に満たされた生活を送れるように、個人や家族を訓練する」（「霊的成長の目標」No.5）
  「青年が神様を第一とし、聖書的な世界観を体現できるように支援する」（「霊的成長の目標」No.7）